
貴方が必要な。

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方が必要な。

【Zコード】

Z2387M

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

哀ちゃんの気持ちです。
黒の組織が壊滅した。
でも、新一が必要だとわかり、
恋人の蘭に
？
あくまでも、新蘭です。

欲望

黒の組織が壊滅して、

蘭さんと工藤君は結ばれた。

これでよかつたの。

でも、私を必要としくてれる人が

いなくなってしまった。

工藤君が好きとこつわけではない。

でも、今の私には、工藤君が必要なの。

「哀ちゃんーねえ、これ、どういひへ？」

「・・・」

「哀ちゃん？」

「蘭さん、工藤君を譲つて。

今の私には、工藤君が必要なの。どうしようもなく。
半年間も工藤君を奪つておいて、こんなこと言ひ資格はない。
でも、身内がいない私は、工藤君以外、頼れる人はいないのよ。

はつ。
つとした。

蘭さんにことなことを囁つづりもつはなかつた。

「哀ちゃん・・・」

でも、私の欲望はきいてはくれない。

「おねがい！蘭さん。

工藤君が居ないとわたし、どうにかないつそうなの。
必要としてくれる人がいないみたいで・・・

邪魔なのー！蘭さんが、邪魔なのー！

私の幸せを奪わないでーーーーー！」

本音がでてしまった。

もちろん、蘭さんが邪魔だなんて思っていない。

むしろ、感謝していく、本当のお姉ちゃんみたいで、憧れなのよ？

「「「めんなさい。どうかしてるわ。
最近、寝不足なの。忘れて？」

「哀ちゃん・・・」「めんね？」

ダッ . . .

「蘭さん！！」

蘭さん、泣いてたわ . . .

私のせいよ . . .

でも、忘れてといったし、本気には、しないわよね？

欲望（後書き）

お望みの小説のならない場合もあります。
ご了承ください。

嘘でじょり・・・?

「灰原！」

「上藤君・・・」

「蘭のやつ、なんか言つてなかつたか？」

「じつしたのよ。」

「急に別れようつて言いやがつて・・・
納得できるか！－」

え。

まさか、蘭さん、本当に・・・

「あ、灰原。手紙がわざつてたぞ。」

「ありがとう。」

封を切った。

”哀ちゃんへ

哀ちゃん。『めんね。

哀ちゃんの気持ちも知らず、勝手に浮かれて。

傷つけたね。少しでも、哀ちゃんの傷が癒えるなら、新一を渡します。

私は大丈夫よ?だから、安心してね。

P . S .

私の努力は無駄にしちゃダメよ?』

蘭

ら・・・んせん・・・

私のせいで・・・

でも、蘭さんのためには、むだにしきゃいけない。

ありがとう。蘭さん。

嘘でじょり・・・? (後書き)

注意点。

私の努力を無駄にしちゃ駄目よ?

の部分は、

哀が私のせいだと自分を責めないようにな
した、蘭の精一杯の優しさなので。

「めでなれ。こなれ。そじてあつがい。

工藤君は、私に変わりず接してくれる。

でも、いつもの工藤君は「いやじゃない。

もっと、自信にあふれてた。

「工藤君。珈琲いたんだけど・・・。
寝ちゃってるのね。」

私は毛布をかけた。

「ん・・・・・ん。」

「え?」

「う・・ん・・・・すき・・だ・・・」

「工藤君・・・」

「私、どうして、こんなことに気付かなかつたんだろう。」

「めんなさい。工藤君。そして、蘭さん。

私は間違つてたわ。

私は工藤君と必要としてる。

これは変わらないの。

でも、本当に工藤君だけかしら？

柳田さんや、田舎君。小嶋君。

博士。

たくせん。たくさん。

いぬじやない。

私が必要としている人たちが。

ほんと、ばかね、私。

「工藤君、起きなさい。蘭さんが来たわよ。」

ガバッ

「「めんなさい。嘘。」

「なんだよ・・・はあ。」

「H藤君、蘭ちゃん、H藤君のことが好きよ。」

「あきなに振るわけねえだろ。」

「『みんなさい。私のせいなの。』

私はあのときのことを、全部話した。

「やつこいじなの。『みんなさい。』

「さんきゅー灰原！」

「おひる・・・ないの?」

「ちやんと話してくれただけで十分さー。」

「つたぐ、お人よしなんだから。
せり、早く行きなさい。」

「ああ。」

工藤君と蘭さん。

1つ借りができたわね。

いぬこなさい。

そして

あじがとう。

「めんなさい。そしてありがとう。」（後書き）

哀「意味わかんないんだけど。」

桜桃「ごめんなさい・・・」

哀「蘭さんならまだしも、なんで工藤君にまで借りをつぐうなきゃいけないのよ。」

桜桃「許して！！」

哀「次のお話に、工藤君が最悪な田こあつ。つていうなら、許すけど？」

桜桃「具体的に？」

哀「蘭さんが他の男とデートとか。」

桜桃「わかった！許してくれるなら、かくーー！」

新一「おい！」

桜桃・哀「いたんだ。 いたの。」

桜桃：つといふことで、新一の最悪な事態。
書いてみようかな？つて感じです。

幸せ

あれから、1年後。

蘭さんと藤君は見事、

本当の夫婦となつたのだ。

勿論、私がした罪はちゃんと償つたわ。

償つといつよりも、蘭さんが、理科の生物を教えてくれ。

ただそれだけのことだった。

2人とも、本当にお人よしなんだから。

△△△

「えーぞ?」

「蘭さん。」

「哀ちゃん。来ててくれてありがとう。」

真っ白なドレスを着込んだ蘭さんは天使よりも美しく、
私も見ほれてしまった。

「紫のドレス。似合つてるね。」

「ありがとう。蘭さんも綺麗だわ。
工藤君にわたすのがもつたいな〜〜よ〜〜。」

「本当? クスクス。」

「「」あなたに綺麗なり、工藤君には本番まで見ないでおこてほしいわ
ね。

園子さんと和葉さんに頼んで、工藤君はいれないよつこしておか
なきやいけないわ。」

「哀ちゃんつたら・・・・・」

「蘭ちゃん、「」めんなさい。」

「いいの。もう、いいんだよ? 哀ちゃん。
だって、私達は友達でしょ?」

「友達つて・・・・隨分年の離れた友達ね。」

「本当は哀ちゃんのほうが1歳年上でしょ?
友達は友達だよ。」

「蘭さん・・・」

「哀ちゃんが一番つらかったんだよね？
だれかに支えてもらいたかったんだよね？
だから、私は支えたいと思つただけだよ？
もつと、誰かに頼つていいんだから。」

「蘭さん・・・でも、私は、可愛げのない女だから・・・」

「前にも言つたでしょ？哀ちゃんはどんな女の子よりも魅力的だよ？
それは姿だけじゃない。中身も。」

「前、哀ちゃんが言つたよね？一回黒く染まつてしまつた心は白には戻れない。」

「悪魔は天使にはなれないの。悪魔は所詮、悪魔のままなのよ。つて。

「哀ちゃんは、十分真っ白な心をもつてゐるよ。」

「え？」

「哀ちゃんは悪魔なんかじゃない。もともと天使なんだからね？
心だって、黒くなんて染まってないよ。
だから、歩美ちゃんたちと喧嘩られるし、口うるさい、私と話してない
でしょ？」

「蘭さん……ありがと。」

「私、男だったら、工藤君から蘭さんを奪つてたかもね？」

「え？」

「私も、蘭さんほど、魅力的な人はいないと思つわ。
だって、あの、工藤新一が選んだ女よ？」
それに、蘭さんは、女の私から見ても、惚れちゃこなれるく
らい、
すういひとだと思つから。」

「ありがとう…」

私は、綺麗な天使がいる部屋をあとにして、

式を今か今かと待ちわびている

おばかな探偵さんの部屋へと向かつた。

幸せ（後書き）

哀「本当、蘭さんには感謝してるわ。」

桜桃「新一には？」

哀「なんで工藤君に感謝しなきゃいけないのよ。」

桜桃「ほら、許してもうつたし？」

哀「あれば勝手にあなたが書いただけよ。」

桜桃「せつでした。すいません・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2387m/>

貴方が必要な。

2010年10月9日22時56分発行